

古代のアクセント註記からみた

古今和歌集解釋の諸問題

秋 永 一 枝

序 論

古今和歌集・拾遺和歌集・源氏物語・伊勢物語など、平安文学作品の古写本にアクセントの註記があることは早くから注目されていることで、既に種々の考察が発表されている。金田一春彦氏は「国語アクセント史の研究が何に役立つか」に於て、国語アクセント史の研究は国語史のほかの部面の研究とかけはなれたものではなく、多くの示唆を与えることができるものであるとして、音韻史・文法史・文献解説・語源・国語史の時代区分等の研究への発言をされ、このほかにも、古代の文献の文字の訓じ方・用い方や、書誌学・国文学史・日本音楽史等の研究にも役立ち得ると考えられると発表されている。

今、古今集の諸写本のアクセントを比較検討した場合、国語学的諸問題のほかに、それらからだだちに、書誌学的・国文学史的問題の多くが導き出されるのを知る。註記されたアクセントの時代的位置及びその正確か否かは、その古写本の成立年代に関係し、

アクセントの比較は諸本の系統を知る重要な鍵になり得る。

ことに口伝が異常なほど重要視され、六条家と御子左家及び、二条家、京極家、冷泉家などの諸流がアクセントにまで各々自家の相伝を守つたことは、多くの古写本に、「相伝」「口伝」「他門」「他流」「他家」「為氏」「行家」「定家」などと、註記したアクセントにまで書入をしていることから知られ、それらの諸本のアクセントを比較すれば自らその諸本がいかなる系統に属しているかにまで言及できるわけである。

古今集に註記されたアクセントの量は諸本によつてまちまちであるが、アクセントを示さなければ意味がとりにくいもの、当時既に古語になつていて一般にはアクセントが不明であつたもの、濁音を示したものに重点的に記載されていて、諸本が個々ばらばらの位置に註記されているものではない。朗読の際にアクセントが重要な役割をはたしていることは「聞きよし」「聞きにくし」などの註のほか、「形見こそ今はあたなれ⁽⁷⁴⁶⁾」の「あた」についての六巻抄の書入からも知られる通りであるが、しかし、

そのためにのみアクセントが註記されたとは思われない。

個々の単語のアクセント及び、純国語学的諸問題については枚数の都合上割愛せざるを得ず、いかなる時代のアクセントを反映しているか、また諸本の系統・成立年代への言及は、源氏物語・伊勢物語のアクセントも充分検討の上発表したいと思うので、今は、従来解釈上疑問とされている諸点のアクセントによる解説のみをとりあげてみようと思う。

註(一) 金田一春彦氏「国語アクセント史の研究が何に役立つか」(金田一博士古稀記念、言語民俗論叢)

大野晋氏「仮名遣の起原について」(国語と国文学・昭和二十五年十二月号)

大原孝道氏「近畿アクセントにおける下上型名詞の甲類・乙類の別の発生に関する一考察」(国語アクセント論叢)
築島裕氏「浄弁本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」(国語アクセント論叢)等。

(2) 「あはは敵也、はかなきよしにあたと云は謬説也、但入道中納言定云内裏御歌合に或人講師にて此詞をあは(仇ト註アリ、筆者)とよみたりしに僻事とはおほへさりしを人うちわらはるる声の聞へしかは誠にききよきに付て有ぬへきかと思なりたりと……まして女などは仇とよまんいかかとそ覚る、仍あた(平瀬ノ声点アリ、筆者)とよむへし」

研究の態度及び方法

古今集の古写本のアクセントは、点または圈点で、四声の形式

によつて註記されているものである。

古今集においてアクセントの記載がみられる古写本の数は相当あるが、後世のもの殆んどは、アクセントそのものを理解せず
に転写したために、註記の位置を全く無視したものが多し。あるものは中間に、あるものは清濁のみを問題として四声の位置を考慮していなかったり、資料があるからといってそれをそのまま利用できるものではない。今私が研究資料としたものの中でも、アクセントの位置が曖昧なものも若干あつて、全く疑問のものはそれをそのまま不明としてとり扱つたが、やや疑問の程度は、同じ語や同じ類の語が「類聚名義抄」や「浄弁本拾遺集」にあるときはそれを参照し、また現在の諸方言のアクセントから多少類推した場合もある。

諸本の声点の異同に就いては、なるべく客観的に比較する態度をとつた。この場合、古写本のアクセントの異同が、A対B・C・Dという数になつたとしても、Aが古い年代の製作または書写で、比較的正確なアクセントを示しており、且つ、一方の流を代表していると思われる場合などはこれを重要視した。なぜならば同じアクセントが註記されたB・C・Dという古写本は、一つの流に属しているかもしれず、その場合Aは、B・C・Dの三本に對抗するだけの重要性を持つてゐるからである。

声点の解釈の方法としては、古今集全体の同語彙のアクセントを比較する以外に、名義抄・拾遺集のアクセントの比較及び現在の諸方言との対応関係を考慮したつもりである。古写本に、必要とする語彙のアクセントがないときには、その複合語や、同語源

と思われるもののアクセントから類推し、用言など同じ活用形がなければ他の活用形から推定してゆく方法をとった。

複合語においては、現在諸家が一語としてとり扱っているものは便宜上一語として論を進めたが、アクセントの山の数、連濁の現象などと脱みあわせて、資料としては二語なり何なりに解釈している場合が多い。

古今集の声点は、「淨弁本拾遺集」が仮名のみで漢字には全く註記されていないのに比して、漢字にもかなりの註記がみられる。また、「淨弁本拾遺集」は、仮名の左下及び左上で、平声・上声の位置にしか記されていないが、古今集では数こそ少いが右上及び右下、即ち去声・入声の位置にも声点の指示がみられるものである。以下、左下・左上・右上・右下の声点は、それぞれ「平」「上」「去」「入」とし、声点が二個あつて濁音を示しているものは「濁」として考察を進めたいと思う。

註(一) 築島氏の前出の論文による。

研究資料

一 寂恵本古今和歌集

冊子本二巻で、上巻は凶書寮、下巻は上野精一氏の所蔵である。複製本があり、三条西公正氏の解説がある。声点は全巻にわたつて数多く、数か所墨点のほかは朱点でしるされている。上巻は凶書寮の原典によつたが、下巻は複製本によつたので疑問の部分があるが、全巻概ね正確な声点が註記されている。

弘安元年十一月上旬以証本書寫訖

桑門寂恵(華押)

此集説授英倫訖

の奥書のほか、上巻の末に次のような識語がある。

古今一部順教御房にこまかによみきかせまいらせ候ひぬ

順教房とは寂恵である。三条西氏の解説によれば「定家薨じて猶日浅き弘安元年(一二七八)に、定家系統の証本を以て、寂恵自ら書写した一証本で」あり、寂恵のような一時代を代表する歌人の一人が、この時代に師とする人としては為氏を推すのが妥当であろうとしている。その裏付としては為氏だけに卿と敬称をつけた資料をあげ、声点も定家系統のものと同概略一致すると述べているが、その点については後の機会に論じようと思う。略号「寂」

二 毘沙門堂本古今集註

巻子本六巻で、京都市東山区山科毘沙門堂門跡に襲蔵されている。未刊国文古註釈大系第四冊に収録されているが、声点は印刷されてなく、橋本進吉氏の声点の写しを金田一春彦氏が転写したものでよつた。疑問の点もあるが、比較的正確な声点が註記されている。仁平四年(一一五四)の清輔の識語、建保二年(一二一四)、嘉禎三年(一二三三)の定家の識語が記されている。第六巻の末に

相伝系図

太上天皇 秀能
如願 行念 上観 慶盛
可有口傳

とある。太上天皇とは後鳥羽上皇のことである。

吉沢義則氏によれば、顯昭・家隆・為兼・定家・為氏等の所説の引用のうち、為氏の説が最も多く、「本書の本文は清輔本が底本となつてゐて、それに定家本を以つて校合されてゐる」とあるのに対し、西下経一氏は中間本であるとし、もとの著者は秀能あたりで、段々に増補されたものらしいと論じている。略号「毘」

三 古今訓点抄

卷子本一卷で、大島雅太郎氏蔵の古鈔本で、複製本があり、橋本進吉氏の解説がある。漢字には朱の圈点、仮名には朱点で声点が施され、稀に朱書した文字には墨で声点を加えてある。註記の数は多いがあまり正確なものとは思われない。声点は複製本によつた。

嘉元三年正月廿九日、受訓説畢 自今月廿一日始之任 一流之説、

勸其調声、尤可為末代之龜鏡、可秘々々、更不可及外見、于時於正親町高倉之宿所、招請或透逸之仁、延誠神主同心、受秘説、同時染筆者也

外宮権禰延明

の奥書がある。

解説によれば「御二条天皇の嘉元三年（一一三〇五）正月二十一日より二十九日に亙り、外宮の権禰宜渡会延明が京の宿所に於て、弟の延誠神主と共に、歌道の名匠を請じて、古今集の声調に關して一流の説を伝受したる時之を筆録したもので「如何なる流義に属するものかはまだ詳かならず」とし

ている。略号「訓」

四 定家本三代集の中、古今集

高松宮蔵の胡蝶装本一卷で、定家自筆影写本である。複製本はこれを縮刷翻刻したもので、日野西資孝氏の解説があり、声点は複製本によつた。声点の数は極めて少いが正確である。

此集家々所稱雖説々多、且任師説、又加了見、為備後学之証本、手自書之、近代僻案之輩、以書生之失錯、稱有識之秘事、可謂道之魔性、不可用之、但如此用捨、只可隨其身之所好、不可存自他之差別、志同者可用之

嘉祿二年四月九日 戸部尙書 花押

于時類齡六十五

寧壻右筆哉

此本付属大夫為相

于時類齡 六十八 桑門

融覺（花押）

の奥書がある。

日野西氏によれば「朱の声点があるが、これは定家の自筆であるか否かは遽に決定しがたいが……陽明文庫蔵為相筆古今集にはこの声点が別紙に書かれて原本に貼込まれてゐるところを見ると或は嘉祿本には自筆によつて附せられたものであるかもしれぬ。然し伊達本には同じく声点があるが、これはこの嘉祿本から移されたものであつたらしいので定家が凡ての書写本に自ら声点を加へたと見ることは出来ない。……」

当影写本は江戸初期に透写されたと思はれる新しいものであるが、克明に原本を模したものである……と。そのため伊達本の声点はあえて参照しなかつた。略号「定」

五 六巻抄 (古今聞書)

卷子本三巻の図書寮本によつた。声点は墨圈点で稀に朱点があり、不明瞭な箇所も多い。序文や二つの奥書などから、三条西公正氏は次のような考察を発表している。

二条為氏は古今集をその子為世に伝授する時、為世の弟の定為も講庭にはべらせた。定為は所謂古今伝授の形式は与えられなかつたが、実質的には兄と同じ聞書を所持していた。行乗は正和三年(一一三二)に定為法印から伝授を受けたが奥書は許されず、為世に先立ち定為が寂したので、先師の聞書をたずさえて、嘉暦二年の冬から三年(一一三二-三三)の二月三日迄為世の二条亭でその説を聞き、奥書をしてもらつたものの如くに考えられる……と。略号「六」

六 下官集 (下官抄)

一卷。橋本進吉氏が書写校合したものを底本とした国語学大系九巻による。声点の数少く、あまり正確とはいえないが、古写本そのものを見ていないので断定できない。著者は定家とされている。略号「下」

七 古今声句相伝聞書 (古今和歌集私集) 略号「声私」

古今声句相伝聞書 (古今口決下) 略号「声決」

各一卷で、ともに図書寮蔵。声点は「声私」は朱、「声決」

は墨の圈点で記され、両者ともあまり正確なものではない。

巻初の識語及び奥書(細部はことなる)で知られるように、頼阿の曾孫にあたる二条家嫡流和歌所法印堯孝が、永年彼に隨身していた法印堯恵に伝授したもので、当然同じアクセントでなくてはならないのに、度重なる転写や、声点が既に理解されなくなつた時代の筆写のためか、相違する部分が多い。

八 古今和歌集注 (顯昭注)

東大國語研究室蔵によつた。声点は朱点で、稀に圈点があり、正位置にあるもの少く、ことに前半はそれが著しいので、部分的に参照するにとどめた。略号「顯」

以上が主な研究資料であるが、このほか、未整理のため拝見できなかった佐佐木信綱氏蔵の「古今和歌集(伝藤原定隆筆)」、「古今和歌集注(二条家系統本一帖)」及び、現在天理図書館蔵の「古今和歌集注(顯昭本古鈔)」は「竹柏園藏書志」の図版のみを参考とした。また「定家本三代集」の古今集複製本に「貞応元年本系古今集」の図版があり、研究資料の一端とした。

図書寮蔵の「古今清濁口決、上」「古今伝授資料、古今集不審并話声」「古今清濁同口決」には、清濁以外に参考すべき点なく、東大國語研究室及び図書寮蔵の「歌林樸樾」もまた、清濁以外には稀に正確な声点をみるのみで、何ら取り上げるべきものはなかつた。金沢文庫の「古今和歌集断簡(片仮名本)」及び、尊経閣文庫の「古今説方口伝秘抄」には朱点があるそうであるが、まだ原本を見ていない。

註(一) 西下経一氏「古今集伝本の研究」

(2) 三条西公正氏「古今集研究の新資料——六卷抄に就いて——」(国語と国文学、新発見号、昭和六年四月特別号)

(3) 佐佐木信綱氏編「竹柏園藏書志」

(4) 日本古典全集収録の「歌林檎櫛」にも声点の記載がある。

倉野憲司氏「歌林檎櫛考異」(国語と国文学、昭和七年)、

小高敏郎氏「歌林檎櫛の諸本について」(国語と国文学、

昭和二十三年十二月号)には、声点についての論及はない。

(5) 「浄弁本拾遺和歌集」複製本の解説による。なお尊経閣文庫「古今説方口伝秘抄」は、疎開先から戻つたばかりで未整理のため参照できなかつた。

各 論

一 それまくらことは(序)

下	平	上	上
定	上	上	上
調	上	上	上
毘	上	上	上
寂	上	上	上
マ	ク	ラ	

この「まくら」は、古くから問題にされているもので、真名序「臣等詞」に当る部分である。顕昭は「臣等」の意で「まく」は自称としての「儻」と同じ意か、と言ひ、「余材」もそれに従つてゐる。「正義」は、「臣」を「まく」という詞はないと否定して誤写だとしてゐる。「陽明家本」には「われら拙きことばは」

とあり、「元評」は三井高蔭の「われらの誤ならむ」というのに従つてゐる。古今集では「我」の声点は「平上」であるから「下官集」以外には適合せず、「下官集」の声点は全体的にみてあまり正確とは言ひ難いので、今は「上上上」として考えてみると、「我」の誤写とは到底考えられない。

「枕」は、「命」「心」「涙」「姿」など同じ類の語で、「名義抄」では「平平上」のアクセントである。古今集では(373)の「草枕なり」に「寂恵本」が声点を付けているが、複合語のためにそれから類推することができない。しかし「心」「涙」などに「平平平」及び「平平上」の記載があり、それらから類推すると「枕」も当然「平平平」か「平平上」のアクセントと考えられるので「上上上」には当てはまらなくなる。

「儻」の記載は、古今集(406)「安倍仲麻呂」以外には見ることができず、そこから類推することはむずかしいが、「儻」の語源がもし「まろし(丸し)」であるならば、「まろし」の声点は「上上上」と考えられるし、接尾の「ら」は上につくもののアクセントに支配されるので丁度合うことになるが、勿論断定はできない。しかし「枕」でも「我ら」の誤写でもないことだけは言えよう。

二 心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ (7)

「寂」註、「折ければ可用之、奥は居也、居ければ歌によむ詞なれとききよからず」

「六」註、「御抄云、折り(上上)ければを奥義抄居ければとよむへしと云、折ければにて下句心たかふへからず、居も歌によ

	下	定	毘	寂
	平	平	平	平
	上	上	上	上
オ				
リ				

?詞なれとききよからず、折をもちゐるへしとそ申されし」

「顕昭は「居りければ」と「折りければ」と二様に解し、「密勘」は「折りければ」、「打聴」は「手に折取て猶花と見まかふ事あらじ、仍て居りければをよろしとす」とある。「空評」では、「をり」を「折り」と取つたのは庭などの梢の雪と見たので、この方が根本であり、梢の雪と見たのは「余材」「遠鏡」「元評」などで、「正義」だけが「かの山の端にのこれる雪も」と解しており、実際に即したおおらかな歌であるから、この解に随うべきだと論じている。

「折る」の声点は(995)「折りはへて」(64)「折りてめ」(739)「足折れ」のすべてに「平上」とついており、「居る」の声点は(1030)「やけをり」(1011)「居る」ともに「上平」であるから、(7)の歌は「折り」のアクセントである。

「居り」が単に聞きよからぬというだけで「折り」のアクセントにしたとは思えないし、「打聴」のように「手に折取つて猶花と見まかふ事あらじ」と思うのは詩情を解さぬもので、折つたと空想してつくつたと思つてはいけないだらうか。勿論「居り」も捨てずに、懸詞だと考えてもよからうが、だからと云つて「梢の雪」を「遠山の雪」とするのはおかしいように思われる。

三 小よろぎの磯立ちならし磯菜つむめざし濡らすな沖にをれ

波

(1094)

	顯	上
	平	平
	上	平
ヲ		
レ		

「顯」註、「居也」「をきにゐたれなみと云也」

この「をれ」について「空評」は「折れよと命じたもの。折るは浪の折れ返つて疊まる意」とあり、「遠鏡」は「折れよにても有べし、又波のたちぬなどいへば居れにてもあるべし」とし、「元評」では「居れの命令格。折れの意ではない」と考察している。

前述したように、「折り」の活用形「折れ」は「平上」であり、「居り」の活用形「居れ」は「上平」であるから、この場合は両古写本の註にもあるように「居れ」であつて「折れ」ではない。解釈からもその方が妥当のように思われる。

四 わがせこが来べきよひなりささがにのくものふるまひかねてしるしも(序)

この「くも」について大原孝道氏(8)「圖書寮本」「金蓮寺本」「応永本」の日本書紀古写本には、この「蜘蛛」の声点が「平上」とあつて、これを転写による誤記と見るべきか、それとも最初に声点のつけられた当時の解釈が現代のと相違していたためか疑問であるが、この点のままであれば「雲」の意になり、歌の解釈上多少無理があるのでないか、と言つてゐる。ところが「寂恵本」では同じ歌に「平上」と「蜘蛛」の声点が示してあり、日本書紀の「雲」は誤写ではなからうかと考えられる。なお「雲」の声点は「名義抄」「古今集」ともに「平上」であり、「蜘蛛」は

「名義抄」に「平上」の記載がある。
五 あるは花をそふとて(序)

訓	上上平
昆	平平
寂	平上
ヲソフ	

「昆」註、「ツ也」
「訓」註、「遅也」

藤村作氏「古今和歌集」によれば、「筋切」には傍に「こふ」とあり、東大國語研究室には「とふ」とあるそうである。また「余材」は「こふの誤写か」とし、「正義」は「一本、花をもてあそぶとあるに従ふべし、もてあの三字おちたる也」とあり、「空評」は「正義」に従うべきであらうとしている。

「悉ふ」は古今集においては終止形の形では出てこないが、連体形「こふる」は「平上上」、連用形「こひ」が「平上」であるから、終止形「こふ」は「平上」であると推定され「寂惠本」とは一致する。

「添ふ」は古今集においては「添はる」の連用形「そはり」、已然形「そはれ」に「上上平」という記載しか見られないが、「名義抄」では「添ふ」は「上平」であり、ともに「訓点抄」の声点とは一致するのであるが、「訓点抄」は「遅也」の註があるため、三本ともに「添ふ」の解釈はしていいないと考えられる。

「遅し」の声点は古今集にはなく、「名義抄」では「上上」で始まるから、「訓点抄」に「遅也」として「上上平」の記載があるのには一致するが、「寂惠本」「昆沙門堂本」には当ては

まらない。

「問ふ」は、古今集において、未然形「とは」は「上上」、連用形「とひ」は「上上」、終止形「とふ」は「上平」の記載があり、「訓点抄」には「遅也」の註があるため三本ともに適合しない。「もてあそぶ」と解釈するとすれば、アクセント以前に「ふ」に濁音の註記がなくてはならないので、これは全く考えられない。

要するに、三本ともに「添ふ」でも「もてあそぶ」でも「問ふ」の声点でもないが、諸本の声点がまちまちのため、いずれを正解とすべきかは決定しがたい。

六 ほととぎすながなく里のあまたあればなほ疎まれぬ思ふものから(147)

声私	平濁	平平
声決	平濁	平平
下	上濁	上平
大	上濁	上上
定	上濁	上上
昆	上濁	上上
寂	上濁	上上
ナカナク		

「昆」註、声点のわきに「汝か」の註があるが、「多義あり」として、「名か名をなく」「永鳴」「汝か鳴」をあげている。

「鳴く」の声点は、古今集、「名義抄」とも連体形は「上上」であるから、「声私」の声点は不正確であり、取りあげない。

「長し」は、古今集、「名義抄」とも「平濁上上」であるから、

「長」は「平濁」であり、いずれにも当てはまらない。

「名」は、「名義抄」では「平」であるが、「淨弁本拾遺集」古今集ともに「上」のアクセントである。しかし、助詞「が」が「名」につく記載がないため、「上上」か「上平」かは判然としない。

「汝が」は、いずれにも記載はないが、古今集には「なれ」に、「上上」と「上平」の二様の註記があり、「汝(な)」のアクセントは「上」「平」のどちらかは類推したが、「昆沙門堂本」に、「汝か」と書入があつて「上上」の声点がある点から、「上上」と考えてよいのではないかと思われる。

この場合、「永」ではないが「名が」のアクセントが不明な以上、「汝が」と言いきることはできない。だが、歌の意味から言つて「汝が」がよいのではないかと考えられる。

七 春がすみながし通ひ路なかりせば秋来る雁は帰らざらまし

下	平上平
定	平上平
昆註	上上濁
昆	平上平
寂	平上平
ナカシ	平上平

「中」は古今集「花の中⁴⁶⁸」に、いずれも「上平」で記載してあるから、「昆沙門堂本、註、清輔本」のはかは、「中し」と解して適合する。西下氏は「中し」以外に「汝が」の説もあると

いうが、前出の「汝がなく」の「汝が」が「上上」ということから、「清輔本」はあるいは「汝がし」と解釈していたのかもしれない。

八 萩が花散るらむ小野の露霜に濡れてを行かむ小夜はふくと

大	平平
下	平上上平
定	平上平平
寂	平上平平
ツユシモ	平上平平

「寂」註、「他門にはつゆしも(平平)とよみてしましまりなる露と申敷、庭訓はつゆしも(平上平)とてたた兩種をいひつづけたりと存す、むすはぬほとは露也、結は為霜各別歟、万葉十一、ゆけとゆけとあはぬいもゆへ久方のあまつゆしにもぬれにけるかも」

「六」註、「当流、露と霜と兩物也、或は秋の霜と云、或は露まじりの霜と云、皆他門説也」として、万葉十一の歌をあげている。

「為家抄」は「露霜とは秋の霜を云也」とあり、「遠鏡」は「露」とし、「空評」はそれに従つてゐる。「霜」は古今集では「平平」、「露」は古今集、「名義抄」ともに「上平」のアクセントである。これらによれば、「露霜」は当時既に流派により二様の解釈がおこなわれていたことが知られるが、「寂惠本」「定家本」「六巻抄」の相伝では、「露と霜」として考えられていたことから、これら古写本は同じ系統に属しているのではないかと

いう推定も生れてくる。

九 奥山の岩、かきもみち散りぬべし照る日の光見る時なくて (282)

調	上	平	上	平	平	平	調
	イ	ハ	カ	キ	セ	ミ	チ

「高野切」「正義」「打聴」は、ともに「岩陰」と解している。「六巻抄」は「山家などに石をたたみてかきとする事有」とし、「顕昭注」は「石をつみてかきにしたるうちにある紅葉也」として「垣」と解している。「寂恵本」の書入には「一説、いはかきもみちは、ほのちひさきもみち也、いはかきにおひたるもみちにや、いはかきもみちとはいふはきとけと同音也」とある。

「名義抄」によれば「岩」は「上平」、「垣」は「上平」であり、「蔭」は「名義抄」「浄弁本拾遺集」とともに「平上」であつて、「訓点抄」の声点からは「蔭」の解釈は導き出せない。この場合はやはり「岩垣」と解すべきであろう。

そ(368)

「寂」註、「心をはみちのせきもととむなと也、せくにはあらず」

調	平	平	上
見註	上	上	
爲氏			
異	平	平	上
寂	平	平	上

この「せき」については諸説がある。西下氏は「名詞にとる説

と動詞にとる説とがある、後者の方がよからう」とされている。「打聴」「遠鏡」「空評」は「関」と解し、「正義」は「誰もせき留る事なかれと也……こは塞留むと云語に勿の言を加へてせきなどめそといへるのみ」とし、「元評」は「堰き止むるのな意、関をかけた」とある。

「関」の声点は疑問であるが、「寂恵本」は「関」と解釈して「平上」の声点をつけてあるのだから、「平平」と考えてよからう。「せく」は古今集に「思ひせく(930)」「瀬をせけば(836)」「せきあはず(557)」に、「上上」とある一例をのぞき諸本すべて「平上」の声点が記されているから、動詞の「せき(連用形)」とすれば「平上」とならなくてはならず、「為氏」は多分、そう解釈したものであろうし、他は「関」と解したものと考えられる。

十一 道に逢へりける人の車に物をいひつきて (405) 調書

調	上	平	上	調
見註	平	上	上	
爲氏				
異	上	平	上	調
相傳	上	平	上	平
寂	平	上		

「空評」は「言ひ寄つて」としている。

「付く」の声点は、古今集「しみはつくとも(663)」「物思ひぞつ(589)」「時につけつ(1002)」などに「平上」の記載があり、「名義抄」「浄弁本拾遺集」とも、活用によつて「平上」「平平」と変化するが、語頭は「平」ではじまつている。

「継ぐ」は古今集「今よりはつぎて⁽³¹⁸⁾」に、「上^濁平」「上^濁上」の二様の記載がある。「塵につげとや⁽¹⁰⁰³⁾」は「訓点抄」の「平上」の一例をのぞき、すべて「上^濁平」と註記してあり、活用などによって変化するが、すべて「上」ではじまっている。

この場合、話しかける意の「云ひ付く」とつても、伝言する意の「云ひ継ぐ」とつても解釈は通じるが、「寂恵本」及び「為氏」では「云ひ付く」とし、「毘沙門堂本相伝」及び「訓点抄」では「云ひ継ぐ」としたもので、当時も両様の解釈がされていたことが分る。

十二 あしたづのひとりおくれで鳴く声は雲の上まで聞えつかなむ⁽⁹⁹⁸⁾

六	上	上 ^濁
調	平	平
里	平	上
寂	上	上 ^濁
ツ	カ	ナム

「毘」註、「付」

「空評」は「聞え継ぐ」と解し、「遠鏡」は「上へ申し伝へて」とあり、「元評」はこれに従っている。前述のように考察を進めれば「寂恵本」「六卷抄」は「上^濁上」で継ぐと解されており、「毘沙門堂本」「訓点抄」は「平上」または「平平」で、「付く」と解されていたことが分り、これも当時から両様に解釈されていたことが考えられる。

十三 陸奥のしのぶもちずり誰れ故に乱れむと思ふ我ならなくに⁽⁷²⁴⁾

「空評」は「しのぶは岩代国の地名、異説が多いが、異説は大體しのぶが地名であるか何うかといふ点にある」とし、西下氏は「しのぶは忍ぶ草と信夫郡との二説があるが、後者の方がよからう」としている。

「忍ぶ」の声点は古今集⁽⁴⁸⁶⁾⁽⁵⁰⁵⁾⁽⁵¹⁹⁾⁽⁹⁹⁶⁾⁽¹⁰⁷⁸⁾のそれぞれに「上上^濁上」の声点があり、「上上^濁上」であることは間違いない。ところが「しのぶもちずり」の声点はともに「平上^濁平」であるから、これは地名の声点ではないかと思われる。西下氏によると、「しのぶ草」は「忍ぶ」に「草」がついたようであるが、古今集「人をしのぶの草⁽⁷⁶⁹⁾」には「平上^濁平」、⁽⁴⁴⁶⁾⁽¹⁰⁰²⁾の「しのぶ草」には「平上^濁上^濁平」の声点があり、動詞の「忍ぶ」の声点を反映していないで、これは「しのぶもちずり」の声点であり「しのぶもちずり」も「しのぶ草」の「しのぶ」もともに地名の「信夫」ではなからうかと想像される。

十四 あはれとも愛しとも物と思ふ時などか涙のいとなるらむ

「毘」註、「最流也」

調	平	上	平 ^濁	平 ^濁	平 ^濁	平 ^濁	平 ^濁
毘	平	上	平 ^濁	平 ^濁	平 ^濁	平 ^濁	平
シ	ノ	フ	モ	チ	ス	リ	

下	平	上	平	上	平	上	平
定	平	上	平	上	平	上	平
六	平	上	平	上	平	上	平
毘	平	上	平	上	平	上	平
寂	平	上	平	上	平	上	平
イト	ナ	カル					

「余材」は「いとまなかるらんのまの字を略せり」とし、「空評」は「いとながる」は「いとなし」の「いとな」と「流る」とを懸けたもので「いとなし」は暇なしだとしている。

「最(いと)」は、古今集「浄弁本拾遺集」「名義抄」ともに「上平」で、「毘沙門堂本」に「最」と書入があるがいずれとも声点は適合しない。

「流る」は古今集において「平上」の連用形の註記があり、「毘沙門堂本」に「流」の註はあるが、これもまたいずれにも当てはまらない。

「無し」は「名義抄」「浄弁本拾遺集」ともに「平」ではじまるが、古今集ではその活用に關係なく「上上」と「上平」の二様
が註記されており、⁽¹⁰⁴⁸⁾の「無かりけり」の「かり」には「上上」が記されているところから「無かる」には「上上平」があると考
えられる。

「暇(いとま)」は古今集に「平平平」の記載がみられる。
これらから私は、「いとま(平平平)なる(上上上?)」の
「ま」を略したというのが、声点にも歌の心にも合つた無理のない
解釈ではないかと考える。

十五 ささの葉に降りつむ雪のうれを重み本くだちゆくわがさ
かりはも⁽⁸⁹⁾

訓他流	平上	上上	上上	上上	上平
当流	平	平	平	平	上
寂	平上	上上	上上	上上	上平
ワカサカサカリハモ					

「訓他流」註、ハに、ワと
よむという註記がある。
「訓当流」ハの平は疑問で
ある。

古今集には「盛り」「下り」ともに声点が記されていないが、「名義抄」では「盛り」は「上上上」、「下り」は「平上平」であるし、「浄弁本拾遺集」には「下ぐ」の活用形が「平」ではじまる記載があり、古今集⁽⁴⁵⁰⁾の「さがりこげ」に「平上平」がみられるので、「訓点抄当流」は「下り」と解し、「寂惠本」「訓点抄他流」は「盛り」と解釈したのではないかと思われる。

十六 君が八千代をわかえつつ見む⁽¹⁰⁰³⁾

大	平上平
里	上上平
寂	平上平
ワカエツツ	

「毘」註、「得」

「空評」は「わかえ」を「若がへらされ」と解している。「名義抄」によれば「若し」は「平上上」であるから、動詞下二の「若ゆ」は「平上上」と類推され、「寂惠本」「六巻抄」の声点に一致する。

「毘沙門堂本」は、「得」と註があることから「我が得つつ」と解してはならないかと思われるが、古今集には「我が」は「平上」の声点がみられるだけで、「上上」には当てはまらないが、「若えつつ」でも、「我が得つつ」でも全体が解釈できないことはなく、当時は両様に解釈されていたのだからかとも思われる。

十七

古くから問題になっているものに「こと」「こと」に「こと」

らば」がある。これについては橋本進吉氏の論文⁽¹⁰⁾が発表されてい
て、もはやそれにつきていようであるが、私はアクセントの面
から敢えて考察を試みたいと思う。

■「事」の声点は「平平」である。

あぢきなしなげきなつめそ憂きこと⁽⁴⁵⁵⁾に逢ひくる身をば捨てぬも
のから⁽⁴⁵⁵⁾

とみのこと⁽⁹⁰⁰⁾とて⁽⁹⁰⁰⁾調書

こと⁽⁹⁶²⁾にあたりて⁽⁹⁶²⁾調書

以上に「毘沙門堂本」「訓点抄」ともに「平平」の記載があり、
「名義抄」「浄弁本拾遺集」もまた「平平」の声点である。

b 「異」「殊」の声点は「平上」である。

秋の露いろいろことに置けばこそ山の木の葉の千種なるらめ⁽²⁵⁹⁾

これについて「遠鏡」は「色々ちがつておるそうな」とあり

「空評」は「色を別々に」とし、「元永本」「筋切」及び「寂
本」の註には「ことごと」とある。「古今声句相伝開書」はとも

に「こ」が「調」になつてゐるが、「寂恵本」は「平上」である。

浪の音けさからことに聞ゆるは春のしらべや改まるらむ⁽⁴⁵⁶⁾

これは、「寂恵本」「訓点抄」ともに「平上」である。

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色⁽⁷¹¹⁾

には、「毘沙門堂本」「訓点抄」ともに「平上」で、「毘沙門堂
本」には「異」の書入がある。

思ふよりいかにせよとか秋風に靡く浅茅の色⁽⁷²⁵⁾

は、「毘沙門堂本」は「平上」で、「色のかはるを云也」の書入

がある。

なお、「名義抄」「浄弁本拾遺集」には「異」は「平上」で記
されている。

○「言」は「平平」である。

こと⁽⁶⁰⁷⁾に出でていはぬばかりぞみなせ川したに通ひて恋しきもの

右の歌のほか、「言伝」(序)「ことわざ」に「平平」と記し

てあることや、「名義抄」も同じく「平平」であることから、

「言」のアクセントは「平平」と思われる。

d 「毎」は「平調上」である。

初瀬に詣づること⁽⁴²⁾調書

大空は恋しき人の形見かは物思ふこと⁽⁷⁴³⁾にながめらるらむ

かふちへいくこと⁽⁹⁹⁴⁾調書

山ほととぎす鳴くこと⁽¹⁰⁰²⁾

日ごと⁽¹⁰⁰⁵⁾

思ふてふ人の心の限⁽¹⁰³⁸⁾ことに立ち隠れつつ見るよしもがな

以上、すべて「平上」である。

●「如」は「調上平」である。

桜のごと⁽⁸³⁾調書

花のごと世の常ならば過ぐしてし昔は又も帰り来なまし⁽⁹⁸⁾

秋萩も色づきぬればきりぎりす我が寝ぬごと⁽¹⁹⁸⁾とや夜は悲しき

かきくらしごと⁽⁴⁰²⁾とは降らなむ春雨に濡衣きて君をとどめむ

あしびきの山ほととぎす我がごと⁽⁴⁰²⁾とや君に恋ひついでにす

る(499) 「昆」註「我如」

虫のごと声に立ててはなかなねども涙のみこそしたに流るれ(581)

逢ふことは玉の緒ばかり名の立つは吉野の川のたきつせのごと(991)

故里は見しごとあらす斧の柄のくちし処ぞ恋しかりける(991)

以上、すべて「上平」であり、「名義抄」「浄弁本拾遺集」と

もに「如し」は「上平」ではじまつている。

f 問題点

イ 君にけさあしたの霜のおきていなば恋しきことに消えや渡らむ(序)

訓	平	平
昆	平	濁
寂	平	濁
コト	上	上
	=	

「訓」註、「事也」

「寂」註、「毎」

「訓点抄」は「事」と解し「寂惠本」「昆沙門堂本」は「毎」と解している。

「空評」は「恋しいと思ふたび毎に」とあるが、「恋しいと思ふ事」としても、解釈はつくわけである。

口 いにしへに猶立ちかへる心かな恋しきことに物忘れせで

「六」註、「毎也」

六	上	濁
昆	平	濁
寂	平	平
コト	上	上
	=	

「毎」は「上上」であるから、「六卷抄」の「上上」は転写の

誤りでもあろうか。ここでは「昆沙門堂本」は「毎」とし、「寂惠本」は「事」と解している。

「余材」「打聴」は「事」とし、「正義」には「人の恋しき度毎に」とある。「空評」は「恋しい事に因つては物忘れといふ事をしなくて」とあるが、「恋しいと思ふ度毎に」でも充分意味は通じるわけである。

ハ 春の花のあした秋の月の夜ことに侍ふ人々を召して(序)

訓	平	上	平
昆	平	上	平
寂	平	濁	上
コト	上	上	上
	=		

「寂」註、「毎也」

「訓」註、「殊也、他流に毎也」

「昆沙門堂本」及び「訓点抄」は「殊に」と解し、「寂惠本」は「毎に」と解している。

「殊に」ならば、春の花の朝や、秋の月の夜に、殊に(近しい)侍臣を召して、と解釈することができる。また「毎に」であれば「春の花の朝」や「秋の月の夜」の二つが「毎」にかかるものと思われる。

二、足びきの山田のそほづおのれさへ我をほしてふ憂はしきこと(1027)

声決	上	濁	平
六	上	濁	平
訓	平	濁	平
コト	上	上	上
	=		

「六」註、「如」

「寂」註、「事」

「訓点抄」の「平濁」は疑問であるが、「六巻抄」及び「古今声句相伝聞書（口決下）」は「如」と解し、「寂恵本」は、声点は記してないが、「事」と書人がしてある。この歌は普通、我を欲しいというわけかわしいことよ、と解釈がつけられているが、「我をほし」に「訓点抄」は「多し」と書入をし、その声点を示している。

六	平	上濁
訓	平	平上
昆	平	平去
我ヲホシ		

「訓」註、「多し」
「寂」は「を」を消して「お」としてある。

「昆」註、「われをはほしきかと云也、物をほすにそへて云也」

「六巻抄」の声点は疑問であるし、「欲し」の記載は他に例がない。

「多し」は、「古今声句相伝聞書」に「多かる（平上上上）」の記載があるのみだが「名義抄」では「平平」ではじまつており、「訓点抄」の「多し」の声点もあてはまり、「昆沙門堂本」もまたこれに従つて解釈してよいし、「寂恵本」も「を」を消して「お」に直しているの、ますます助詞の「を」とは取り難くなるが、それならば一体どのように解釈するかとなると、「憂はしきごと」と共に疑問が残つてしまうのである。

木 ことならば咲かずやはあらぬ桜花見る我さへにしづ心なし(82)

「昆」註、「如此也、二条義也」

「下」註、「如此ならば也、御抄云、花のこと世のつねならば

と云も同事也」

「声決」註、「如此之」

顛	上	上
声私	上濁	
声決	上濁	平
六	上濁	平
下	上濁	?
昆	上濁	平
寂	上濁	平
コトナラハ		

「顛」註、「おなしくはと云詞也」「顛昭註」をのぞき、「如」の解釈である。「昆沙門堂本」に「上平」と「濁平（濁上平と今は考えて論を進める）」とをあげたことは、「如」のほかに「上平」の声点が当てはまるものを考えたからに違いない。

橋本氏の論文にある「如」と同語源の「同様」という意味をもつ「こと」は、もしかしたらこれではなからうか。

「異ならば」「殊ならば」の解釈は「平上」の声点がないのでここでは全く適合しない。

ことならば君とまるべく匂はなむ帰すは花の憂きにやはあらぬ(395)

声私	上濁	上濁
声決	上濁	平
訓	上濁	平
昆	上濁	平
寂	上濁	平
コトナラハ		

前出と同じく、「昆沙門堂本」の「上平」以外は「如」の解釈である。勿論「事」「異」「殊」ではない。

ことならば言の葉さへも消えななむ見れば涙のたきまさりけり(856)

	声私	声次	調	異	上平	上平	上平	上平	上平
コトナラハ									

前出と同様である。

ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世の中の玉だすきなる
(1037)

	異	上平
コトナラハ		

以上(82)(395)(894)(1037)ともに「異」「殊」「事」の声点はなくて、「如し」

の語幹の声点である「上平」及び、「上平」の二様である。

「上平」と「上平」は、清濁の相異はあつても、同じ声点の型で

あるから同語源という事も考えられないではない。これについて

橋本氏は、「異」「斯く」「此の如く」「斯と」「悉く」「事」

「言」等の説をひとつひとつ検討された結果、「如」と同語源の

もので、口語の「同じ」又は「同様に」、文語の「同じく」の義

である「こと」の説をたてられた。これについて野村宗朔・北条

忠雄⁽¹²⁾両氏は、代名詞の「此(こ)」に助詞の「と」が加わつたも

のだと主張されている。「此(こ)」の声点の例がなく「こなた」

「これ」「このも」などから類推すると、「此(こ)」は「上」

であり、次につづく助詞はその性質により「上」あるいは「平」

となるので、声点からはどちらとも断定できないが、何らかの参

考にはなりうると思う。

ただし、「同じくは」の「こと」の意として橋本氏が解している

「かきくらしことは降らなむ⁽⁴⁰⁾」には「上平」の声点なく、すべ

てが「如」の声点であることから、奈良朝の「ことさけば」「こ

と降らば」などのように「こと」がただちに動詞に連なるもの、

及び、「なり」に接して「ことならば」の形をとるもののみが

「同様」の意味の「こと(上平)」と考えることができ、助詞

「は」に接して「ことは」となるものは一応きりはなして考えた

方がよいように思うが、私の浅見であらうか。

以上、「こと(上平)」と「如」について論を進めたが、当時

はやはり「如」と解した流派の方が多かつたというところだけは言

い得る。

註(一) 釈契沖「古今余材抄」

(2) 香川景樹「古今和歌集正義」

(3) 金子元臣氏「古今和歌集評釈」

(4) 藤原定家「類注密勘」

(5) 賀茂真淵「古今和歌集打聴」

(6) 窪田空穂氏「古今和歌集評釈」

(7) 本居宣長「古今集遠鏡」

(8) 前出の論文

(9) 西下経一氏「新訂要註、古今和歌集」

(10) 橋本進吉氏「『ことさけば』の『こと』と如の『い』

と』(国語と国文学、昭和十五年十月号)」「『ことさけ

ば』の『こと』の語義について」(国語と国文学、昭和十

六年十一月号・十二月号)ともに「橋本進吉博士著作集第

五册上代語の研究」に収録。

(11) 「『ことならば』の『こと』」(国語と国文学昭和十六年七月号)

(12) 「『ことさけば』『ことならば』の『こと』と『こと』の考察」(雑誌文化昭和十六年三月号)

結 び

従来、古今集の解釈において疑問とされている箇所アクセントの註記のあるものを取り上げて考察してみたが、勿論これら諸本のアクセントが全く正しい解釈に基いているものとは考えられない。厳密な意味では、当時の一流の人たちの解釈を裏付ける一証左であるとは言えないのかもしれない。

しかしながら、普通に藤原基俊から始まるといわれている古今集の伝授の風潮が盛んな時代でもあり、比較的古今集の成立したのに近い年代の人たちの解釈の間には、古くからの言伝えが残っていたのではないかという意味で尊重されると思う。

ところが六条家と御子左家、二条、冷泉、京極家などの歌道の家筋が生じて、アクセントにまで互に自家の相伝を主張し他流を排したことは、各論において言及した如くである。そのような諸流の軋轢が、ことさら異を立てさせたということもあつたろう。

また「定家本三代集の中、古今集」の奥書に「近代僻案之輩、以書生之失錯、称有識之秘事」とあるように、伝授における誤聞なり、誤写なりがそのまま誤り伝えられて、恰もそれが、その流の重要な秘伝であるかのようにされたこともあつたに違いない。だが、ともかくもアクセント解説が、古今集解釈の一つの鍵であることだけは断言できよう。

付 記

古写本に片仮名で書き入れてあるものも、ここでは平仮名で統一して引用した。

文中、諸先生の敬称を略したことをお詫申し上げる。

最後に、この論文作成にあたって金田一春彦先生より種々の御指導を賜つたことを明記したい。